

◆海員隨想 続ボーアイ長（見習い）賛助組合員④ 今井 武

【女性の解放で男の“難”】

母港室蘭以後、八幡港へ連続寄港。飲むのも“恋”するのも馴染み深い憩いの港だった。あるとき、さあ来るべきものが来た。「売春防止法」法 118・1956(昭和 31)年 5 月 24 日、施行 1957(昭和 32)年 4 月 1 日。俗耳でこの風説を予期しており、誰もが「まあ、なんとかなるさ！」の構えであったが、一航海後、八幡へ入港で、例の色街を散策。昨日までの“姫の商店”は完全閉鎖で、その一部は飲み屋、旅館に衣替え。一郭はまさにお化け屋敷のゴーストタウンだった。それは次の神戸も横浜も同じく、あでやかな玄人たちのあの艶笑と香りはいずこへ。

古参ボーアイ長の昇進は相変わらずお座なりで、なにせ人を採用しないので…の一言。このころ私は、ついに密かな決断をしていた。正月、船内無礼講の折、サロン食堂の宴の声に紛れて、船長に「見習い 3 年近いですがー」と静かな耳打ちに「それはご苦労さん」の一言だけだった。まさにうんざりの態だ。もう人は当てにしない。

子どものころ“自分のことは自分でやれ”という親の格言があった。船は川崎の岸壁に着いた。特の上陸許可を取って、私は一直線で会社へ向かった。所属した石原産業汽船も他社と同列で、戦争被害甚大の船舶減少をきたしていた。船舶運営会解散後、私たちは啄山丸とともに石原を離れて本来の船主へ移籍した。

石原は戦前から現在まで陸上に産業を有し、その体をなしていたが、海運部門は当時客船「はあぶる丸」(5500 総トン)をはじめ数隻をジャワ航路に走らせ、日本郵船系の南洋海運(東京船舶)と競っていたが、終戦後生き残った虎の子のタンカー「はりま丸」(2TL 型、1 万総トン)は、敗戦時、中国に停泊中だったため、その後、賠償船で中国へ引き渡した。

その他の戦標船 2D 型貨物船 2 隻は乗組員とともに国内売船で、所有船ゼロの状態に変貌した。

「海員だより」